

S君の「願い」に出会ったとき



笹田 哲平（大阪支部 東大阪市立布施小学校）

1 床や壁に頭を打ちつけるS君

S君との出会いは衝撃的でした。始業式が行われる体育館に、S君を連れて行こうとすると、その場にしゃがみこみ、頭を床に打ちつけるのです。止めようとする、今度は叫びながら教師の肩に、頭を打ちつけてきました。前担任の引き継ぎや学校での様子から、想定はしていましたが、内心では「この子を担任するのか…」と不安でしかありませんでした。新設統合校として初年度で、さらに初めての支援学級担任という重圧が、重くのしかかりました。多動も全開で、目を離すと勝手にどこかへ行ってしまうこともあり、S君からは1秒も目が離せない日々が続きました。それでも日々、悪戦苦闘しながら関わり続けました。場面転換に弱いS君には、その日の時間割を一緒に確認して、先の見通しを持たせて「常に」行動を共にしていました。ただ、それでも頭を打ちつけることは止められませんでした。時間割にも慣れ始めた頃、運動会という大きな行事が待ちっていました。裸足で組体操に参加することを先生たちから求められ、パニックになりながら必死の抵抗をしていました。言葉での意思表示が難しいS君にとって、頭を打ちつけることで必死に、「裸足なんか嫌だ！」と訴えていました。S君はあらゆる面で授

業への《参加しづらさ》を持ち合わせているのでした。

2 人を求めているのだろうか

S君は自閉症です。話す言葉もほとんどが独り言で、その内容も周りの先生や友だちにも理解しづらいものでした。当然のように、クラスの友だちとは話が合わず、S君独特の世界観で毎日を過ごしていました。授業中は、自由帳に黙々と絵を描くことがほとんどで、休み時間は友だちと過ごすより、支援学級にこもって、パソコンで好きな動画を見続けている時が至福の時間なのです。その日常は「S君」と「モノ」との関係性だけで成り立っていました。そんな彼の世界観に少しでも入れば、人を求めないS君でもこちらを向いてくれるのでは、また彼の気持ちを外の世界に向けさせることができるのではないだろうかと考えました。S君の好きなものといえば乗り物や仮面ライダーです。先生たちの所有している車種などは全て頭に入っているぐらいだったので、自分の好きなことを通して、人と繋がることはできました。私も、歴代仮面ライダーの名前と決めゼリフは全て覚ええました。少しずつS君の世界に入っていく、《何を言っても受け止めてくれる人》となるように、日々関わり続けました。そ

んな日々だったので、「S君」と「モノ」の間に「私」という存在が生まれつつありました。

3 あのS君が初めて・・・

これまでの体育の授業には全くといっていいほど参加できなかったS君が、跳び箱の授業では、いつもと様子が違ったのでした。並べられている跳び箱を前に、目をキラキラさせていました。その様子を見て私は、「S君が初めて取り組んでくれるかもしれない」と思い、S君を跳び箱の前に誘いました。ただ、開脚跳びなどはS君の実態には全く合わないため、別の方法を考える必要がありました。考えあぐねていると、跳び箱の向きが縦から横に変わっていました。すると、S君の動きも変わったのです。ゆっくりと跳び箱の上によじ登り、その上に立ってみせたのです。普段の目線よりも遥かに高い位置から見える景色を、楽しんでいるようにも思えました。すると、S君が私にむかって両手を差し出しました。《手をにぎって》の合図であり、同時に《ここからジャンプしたい》の合図でもあると確信しました。そして、私の手をギュッと握ったS君は「プワー！」と声をあげて跳び箱の上から飛び降りました。その感覚が楽しかったS君は、すぐに起き上がり、また別の高さの跳び箱へと向かって行きました。

4 本当は人を求めている

人を求めているS君と決めつけていましたが、跳び箱からのジャンプでは私という「人」を求めているのです。何度も跳び

箱の上に乗って、私に両手を差し出してくれました。跳び箱の向きが変わって、「怖いよー」と声まであげながらも手を差し出してくれたのでした。臆病で慎重な性格のS君は、自分が少しでも怖いと感じたら、これまではやろうともしませんでした。しかし、「怖い」と言うことで、《相手に助けを求める》ことができたのです。些細なことかもしれませんが、S君にとっては成長（発達）だと捉えました。怖いけど跳び箱から飛び降りたいという矛盾した気持ちから、S君の内面から湧き出た瞬間だったのです。

5 「これならいける…！」

手をにぎって飛び降りることを何度も繰り返しているうちに、S君が手を差し出さなくなりました。むしろ、こちら側から手を差し出してもそれを拒んできました。《自分の力だけでやりたい》という気持ちが育ってきたと気づきました。じっくり時間をかけ、自分のタイミングで跳び箱に飛び乗り、そして自分ひとりで飛び降りたのです！これには驚きました。この日驚いたのはこれだけではありません。発表会と称して、クラスみんなの前で実演する場が設けられました。人から注目されることが苦手なあのS君がその時は堂々としていました。なんと、自分ができそうな高さに跳び箱の段数を変えてくれてと教師に指示を出すことまでしたのです。そして、S君の口から「これならいける…！」という言葉が出た瞬間、クラスのみんなが見ている前で自分の力でやり遂げたのです！

※続きは当日の報告で。